



平成 30 年 9 月 27 日

「迷惑をかけない死」とは何か？～日本人の死生観へのアプローチ～

◆発表のポイント

- ・超高齢社会を迎えた日本において、老い・看取り・死に対する新たな捉え方を見いだすことは、生活の質（QOL）を高めるうえで重要な課題です。
- ・「迷惑をかけない死」をキーワードとして、過去の日本における老い・看取り・死に対する考え方とその背景、現代との共通点や差異を検討しています。
- ・新たな捉え方を見いだすために必要な異分野融合研究を推進し、精神的な QOL の向上に資する新たな指標や思想の創出を目指しています。

超高齢化・人口減少を迎えた日本において、老い・看取り・死について、これまでとは異なる向き合い方が余儀なくされています。こうした状況のなかで、現代日本においては、老い・看取り・死に関して「迷惑をかけたくない」という意識が広く見られます。しかし現実には、家族や子どもに「迷惑」をかけたくないと思いつつも、実際に病気になり介護を要する状態になれば「迷惑」をかけざるを得ず、「迷惑」をかけたくないならば死を選択せざるを得ないという状況に直面します。このことは、現代人の精神の健康に対して悪影響を与えていると考えられます。

以上の現状に対して、大学院ヘルスシステム統合科学研究科の本村昌文教授の研究室では、現代日本の老い・看取り・死に関して広く見られる「迷惑をかけたくない」という意識について研究しています。歴史的にどのように形成されてきたのかや、現代の意識の特質は何か、この意識のもつプラス面とマイナス面は何かを、さまざまな学問分野（哲学、宗教学、思想史、日本史、文化人類学、科学技術史、看護学など）と共同して解明し、精神的な QOL の向上に資する新たな指標や思想の創出を目的としています。

■発表内容

<導入>

高齢社会の到来によって生じる諸問題への対応は、世界各国に共通する喫緊の課題です。とりわけ日本は、現在 65 歳以上の人口が 27.3%となり、2036 年には 33.3%に達し、およそ 3 人に 1 人が高齢者という時代を迎えると推測されています（『高齢社会白書』2017 年度）。他方、日本の総人口は減少過程に入っており、2029 年には 1 億 2000 万人を下回り、2053 年には 1 億人を割って 9924 万人になると推測されています（同上）。世界に類をみない高齢社会を迎えるとともに、人口減少という状況に直面している現代日本においては、老いて死を迎える人が増加する一方で、それを支えるマンパワーが減少するなど、老い・看取り・死について、従来とは異なる向き合い方が余儀なくされています。



PRESS RELEASE

こうした状況の中で、現代日本においては、老い・看取り・死に関して「家族や子どもに迷惑をかけたくない」という意識が広く見られます。しかし現実には、実際に病気になり介護を要する状態になれば「迷惑」をかけざるを得ず、「迷惑」をかけたくないならば死を選択せざるを得ないという状況に直面します。結果的にこの「迷惑」を忌避する意識は、要介護者や終末期医療対象者の精神的な QOL の低下や、介護を受けることや病気、老いに対するネガティブイメージの形成につながっていると考えられます。超高齢化や人口減少によって老いて死を迎える人が増える一方で、それを支える人が減少する現代社会においては、精神の健康を保つために、老い・看取り・死に対する新たな向き合い方の構築が求められています。

<背景>

これまで日本思想史研究（日本におけるものの考え方や意識に関する歴史的考察）の分野においては、過去の素材をもとに、それぞれの時代の思想や意識、またその展開を再現することが中心的な課題でした。それに対してこれからは、過去の素材をもとに思想や意識を歴史的に探究するとともに、その探究が現代そして将来にいかに関与するのかを考えることがより必要になってくると考えています。こうした問題意識から、本村教授の研究室では、現代日本の喫緊の課題である老い・看取り・死と向き合う日本思想史研究、また異分野との共同研究を推進しています。

<研究内容、業績>

現在は、これまでに検討してきた近世日本の死生観の研究をもとに、老い・看取り・死に関して現代日本に広くみられる「迷惑をかけたくない」という意識の歴史的形成とその背景、「迷惑をかけたくない」という意識のもつプラス面とマイナス面の検討を行い、それらを踏まえた、精神的な QOL の向上に資する新たな指標の創出を目指して、さまざまな学問分野との共同研究をスタートさせています。

「迷惑をかけたくない」という意識に通じる表現は少なくとも中世日本にまでにさかのぼることができます（例えば、『徒然草』第 172 段「老いぬる人は、精神衰へ、淡く疎（おろそ）かにして、感じ動く所なし。心自ら静かなれば、無益のわざを為さず。身を助けて愁（うれひ）なく、人の煩（わづら）ひなからん事を思ふ」など）。現在は、現代の「迷惑をかけたくない」という意識に通じる内容が歴史的にどこからスタートするのか、そのスタート時点から現代までどのように変遷し、今に至っているのかという点について、日本の各時代の思想史、日本史、日本文学の研究者と共同して解明することを目指しています。

また、「迷惑をかけたくない」という意識は表層的なもので、実際にはさまざまな意味内容をもっているという仮説から（先行する研究では「自立した自分でありたい」、「相手への思いやりや気づかい」など）、この意識は重層的な構造をもつと考え、そのメカニズムを解明したいと考えています。

<展望>

今後は、上記の研究を推進していくために①歴史的形成に関する研究班（日本思想史、日本史、

**PRESS RELEASE**

日本文学、医学史など)、②現代における様態に関する研究班(哲学、宗教学、看護学など)、③異なる地域・文化との比較に関する研究班(文化人類学など)、④①~③の成果を統合的に捉える方法論の創出に関する研究班という4つの研究班を組織し、現代日本の老い・看取り・死に関して広く見られる「迷惑をかけたくない」という意識の本質についての研究を、5年間をめぐりに行う予定です。その後、以上のような人文学の諸分野が基幹となって展開する老い・看取り・死に関する研究成果を医療や介護の現場に活用することを目指す「老年学」という学問分野を構築することを目指しています。

<略歴>

1970年生まれ。東北大学大学院文学研究科博士課程後期3年の課程修了。博士(文学)。専門は日本思想史。東北大学大学院文学研究科助手、東北大学百年史編纂室教育研究支援者、岡山大学大学院社会文化科学研究科准教授、同教授を経て現職。

<お問い合わせ>

岡山大学大学院ヘルスシステム統合科学研究科
教授 本村昌文

(電話番号) 086-251-7395

(メール) tomtom@okayama-u.ac.jp



岡山大学は、国連の「持続可能な開発目標 (SDGs)」を支援しています。